

MUGENDO

STIGMA

Side-Koichi Vol.1

SAMPLE

For Adults Only



とりさん

- ※ 以下本編より抜粋。
- ※ 書式は本編と同一です。あなたの環境での表示を確認して下さい。
- ※ 本編は全7章。約六九〇〇〇字。挿絵二枚。中表紙あり。
- ※ 本編には伏せ字等はありません。
- ※ 本サンプルも成人向けです。また無償ですが、特に部分を切り抜いての再配布は絶対に避けて下さい。

僕は今なら、あの日が僕とおじさんにとってどれほど大きな意味を持っていたか、わかると思う。おじさんはきつと、最初から知っていた。初めて僕の手をにぎった、あの時から。これから先のこと、僕はおじさんと同じぐらい、わかると思う。未来のことはだれにも予想がつかない？ それは「普通」の人の場合。……

あの日はただ気持ちよさと幸せがあった。僕にはなかったはずのものをおじさんはくれた。でもそれは今の僕のつらさと苦しきの始まりで、おじさんにはそれが最初からわかっていた。僕とおじさんにはどんな終わりが来るのか……でもそれがどんどん近づいていること、今僕はとてもつらくて苦しいはずなのに、そんな全てが終わることが悲しいこと、それが悲しい僕自身が、僕にはとてもこわく、おじさんよりもこわく感じられること、それだけのことが僕には今わかっていた。

■年生の終業式のあと、二人とぼくは引こしして、新しいマンションに住むことになった。ぼくは■年生の始業式から新しい学校に通うことになったから、前の学校でも、新しい学校でもめんどうなあいさつをする必要もなくて、目立たなくてよかったから、とても助かった。

みんなぼくのお別れ会なんてめんどうに決まっていた。ぼくはいつも、なるべく目立たないようにしてきたから、学校休んでもだれも気にしないし、■年生からいなくなっても、だれもさびしがらないし、かなしまないし、気づかない子の方が、きつと多いと思う。新しい学校でも、できるだけ目立ちたくなかった。目立つときつと、みんなぼくをきらうと思うから。なんでいるの？とか思われると思うから。そうなると、いじめられたりするかもしれない。そういうのはぼくもつらいし、先生にべれたら、いじめた子も、先生もとてもめんどうなことになる。それよりなにより、先生からそういうことが、二人にばれるのが一番いやだった。

勉強は、普通にやればちょうどまん中ぐらいになる。運動はあんまり得意じゃないから、一番ビリになったり、みんなの前で大きな失敗をしないように、けっこうがんばらなきゃいけないくて、体育はあまり好きじゃない。

だからってぼくは、だれにもネクラとか思われていない。そう思われないうちに、気をつけている。休み時間やほうか後には、校庭でドッジボールやサッカーをして、みんなと遊ぶ。たくさんしゃべると、きつとぼくは変だつてだれかが気づくんじやないかと思うから、なるべくしゃべらないで、男子同士だけで、体を動かして遊ぶ。

背は、男子の中では少し高い方。ちよつとだけ太っているかもしれないけど、服をぬがないとわからないくらいで、他に「デブ」の子が何人かいるから、大丈夫。身長が高くなりすぎても、太りすぎても目立っちゃうから、おかしは食べすぎないように、あとは、その意味でも、休み時間外で遊ぶようにしている。

新しい学校もまたけつこう都会の中で、校区にあまりいい遊び場所がない。だから、学校のグラウンドが五時まで開放されていて、ぼくは目一ぱいまで、学校で遊んでから家に帰る。なるべく、家にはいたくなかつたから。

二人が帰ってくるのはたいがいおそいから、一人の時間が長い。でも二人の住んでいる空気は、引っこしてすぐに新しいマンションの部屋にもしみついた。当たり前だけど。その空気が、ぼくにはたえられなかつた。

二人はぼくのお父さんとお母さん。だけど、血はつながっていない。ぼくの本当お母さんは、ぼくがまだ幼稚園くらいの時、死んじゃった。そのあといろんな人の所でくらしして、しせつに行つて、学校に上がる前くらいに、二人の子どもになった。しせつに何回か会いにきて、遊園地に行つたりしたときは、けつこうやさしかつたけど、ぼくは二人とも好きじゃなかつた。よく考えたらぼくは、だれも好きになつたことがないような気がするけど、二人は、「なんかいやだな」って、最初に会つた時からぼく、感じていた気がする。

†

ゴールデンウィークがもうすぐつていう、土曜日だつたと思う。その日は授業して、とびとびになつちやう普通の日を休みにして、七連休くらいにするんだつた。午後からのさんかん日。二人とも来なかつた。……来なくてほつとした。でも授業が終わつたら、友だちはみんな帰つちやつた。先生も早く休みたいたいで、学校もすぐ閉まつちやつた。

二時半。このあとどうしよう、とか考えたら久しぶりにかなしくなつてきた。今日だけじゃなくて、休みが七日間もある。

ぼくはマンションの前の、小さな公園の花だんの前にすわって、指で土に穴をほって、ぞろぞろ出てきたアリの行列を長長と見つめていた。日がしずみかけて、半ズボンから出ている足が、ちよつとさむいな、家にもどろうかな、とか思った時、後ろから「幸一君？」って声をかけられて、ぼくはびつくりしてぱつと立ち上がって後ろをふり返った。

見おぼえのある男の人だな、つて一しゅん、思つて、すぐ、マンションのおとなりのおじさんだとわかった。まっ黒い、上等そう背広をきていて、シャツも灰色系。お父さんよりちよつと、年上の感じで、何だかこわい人、つて、ぼく、最初引こしのあいさつに行つたとき、感じた。お父さんとお母さんは、このおじさんが好きみたいな顔をしていた。インテリだから。でも本当は少し、やきもちやいてると思う。週に何回か、大学で先生をしていて、本も書いていて、新聞にも文章がのることがある人らしい。英語の本のほんやくもしているつて。

おじさんにはもう一つ特ちようがあった。足が片方、あんまり動かなくて、歩き方で、遠くからでもあのおじさん、つてわかる。走るのもしできないみたい。つえをもつて歩いてる。

おじさんに引っこしのあいさつをさせられた時、おじさんはしゃがんで目の高さをぼくに合わせて、

ぼくをじつと見て、笑って、頭をなでた。ぼくはそういうのがきらいで、すぐに逃げちゃうくせがあった。体を人に、特に大人の人にさわられるのがきらいだった。でもこのおじさんになでられたとき、ぼくは少し後ろに下がるとかもできなくて、されるままになでられてしまった。手をさし出されて、ぼくはあく手ままでしてしまった。目立たないようにしかたなくするんじゃないかと、自ぜんに手が動いてしまった。おじさんの手は大きくてあたたかくて、何だか必要以上に力が入っているように思えた。それ以来、ぼくはこのとなりのおじさんがこわかった。

「幸一君。こんにちは」

おじさんはやっぱり笑顔で、こしをかがめて、目の高さをぼくに合わせて、話しかけてくる。

「あ……こんにちは」

ぼくはもじもじしながら、頭を下げた。おじさんと目を合わせないようにしているけど、すごく見つめられているのがわかって、なんだか落ちつかない。どきどきした。とうめいなまま、ほうつておいてくれればいいのに、どうしておじさんはぼくにこんな近くだろう？

「幸一君、おとなりだから、いつでも遊びにおいでって言ったのに、ちっとも来ないよね。おじさんさびしいな」

また頭をさわられた。ぼくは動けないし、逃げられない。こわい。

「いつでもいいんだよ。夜中にお仕事することもある。夕方はね、けっこうひまだ。こうして、さん歩したりしている。幸一君もひまそうじゃないか。ずっとこんな所で一人でさ」

いつからぼくを見ていたんだろう。どうしてぼくにそんなにきょう味をもつんだろう。ぼくはどうめいなはずなのに。

「よかったら今からうちにおいでよ。晩ごはんまでに帰れば、大丈夫だろ？」

ぼくはますますはずかしくなつて、うつ向いて、どうしてかわからないけど、ただにぎられていた手でおじさんの手を、強くにぎり返してしまった。そんなの初めてで、ぼくはあわてて手の力をゆるめた。

おじさんは一人ぐらしらしい。おくさんは早くに死んで、子どももできなかつたんだって。一人だつたら、かなり広いと思う。大学の先生して、本を書いて、ほんやくもしているおじさんは、きつとお金もちなんだと思う。でもおくさん死んじゃつて、ずっと一人だつたんなら、さびしいんじゃないかな、仕事も家で一人でしてたら、かなしい気もちになる時、ないかな、って、ぼくはちよつと思つた。でもおじさんは偉い人で、大学で生徒を教えて、新聞に意見を書く。きつとたくさんお友だちも

いて、そんなけいしている人も、多いはずだ。ぼくと似たような気もちになんかなるはずがない。さびしいとかかなしいか思っても、ぼくのそれとは全ぜんちがうはずだと思う。

おじさんの部屋はすごく整理整頓さんされているんだけど、テレビのある反対がわのかべは、天井まで本だなだった。下の方の本はぶあつくて大きくて、英語の書いてある古いのもあった。でもマンガもあった。ぼくたちが読むみたいなの、週刊のマンガざっしが、七冊くらい、本だなの前につんであった。それにはびっくりした。おじさんは大人で、すごいかしい人のはずなのに。

ぼくはきよろきよろしていたらしくて、おじさんにかかるく頭をつつかれて、やっとそんな自分に気づいた。頭つつかれるなんて……。

「でも、本が一ぱい……うちにはこんなの、ないです」

「ほとんどお仕事の本で、おもしろくはないよ」

おじさんは笑いながら、ぼくの後ろに回って、ぼくの両肩に手をそえた。何でぼくにそんなことするの？ ぼくはどうして逃げようとしなんだろう？

「……でも、マンガも……」

「ああ、好きなんだよ。幸一君みたいな　　が好きそうなやつも。幸一君はマンガ好き？」
　　ぼくはうなずいた。でもうちにはあんまりない。おき場所がないし、お金もない。学校みんなには内しよにしているけど、お母さんはおこづかいをほとんどくれない。外でごはん、食べてこいとか、買ひもの、させるときだけお金をくれる。ぼくはそういうお金から、少しずつのこして、ためて、たまにマンガを買う。

　　おじさんはマンガにとってもくわしかつた。ぼくはやつと、そのマンガのどういふ所が好きで、とかいふ話を、おじさんにきかれるままにだけ、話すことができた。こんなにしやべつたこと、生まれて初めてだつた。だんだんぼくは、こうふんしてきていた。一人で思うだけで、だれにも話さなかつたことを、おじさんに話す。おじさんは笑顔で、聞いてくれた。いつの間にかおじさんをこわいと思わなくなつていた。

　　おじさんはぼくを、たたみの部屋にもあん内してくれた。そこはうちと違つて、本だらけ。マンガも一ぱい。リビングと違つて、かなりちらかつていたけど、ぼくには宝の山に見えた。

　　そう言われて、ぼくははますます、顔が熱くなつた。おじさんはやさしい。こんなにやさしくされたのは、ぼく、初めてだつた。だれにでもやさしい人なんだろうか。だつたら何で、ぼくは最初この

人を、こわいと思ってしまうたんだろう。

一つの大きなクッションに、おじさんとよこにならんですわった。おじさんが先にすわって、クッションの左半分あけて、ぼくをさそった。ぼくはぐずぐずしていたけど、おじさんが手を引っぱって、ぼくをまよこに座らせて、ぼくの肩をきゅつとだきよせて、ぼくとおじさんはぴたりくつついてすわった。いつものぼくなら、ぜったい逃げる。こういうの、すごくいやなんだ。けど今ぼくが動けなくて、おじさんにされるがままなのは、おじさんがこわいからじゃなかった。……こういうのが平気なところか、ちっちゃい子みたいに、もつとしてほしいと思う自分がいて、それにびっくりして、はずかしかった。

何でこんなに、おじさんはぼくにやさしいんだろう。他人なのに。ただおとなりなだけなのに。ふしぎだったし、何だか後で、かわりに悪いことがありそうな気がして、こわかったけど、ぼくはどうしても、おじさんの部屋に遊びに来るのをこれつきりにはできなかつた。……

2

ぼくは首をふった。お母さんは料理をしない。少なくとも、ぼくのためには、作ってくれたことはない。今日のお昼ごはんは、五百円玉だ。

おじさんはやさしいし、とても親切だけど、どうするか決めているのは全部おじさんで、ぼくは一つもいやともはいとも言う前に、全部やることを決められている。でもその決められたことは、ぼくにとつていやなことは、昨日から一つもなく、ぼくがしたいのに自分から言い出せなかったことも、たくさんあった。

ぼくとおじさんは手を洗い、ぼくはオレンジ色のエプロンをさせられた。家庭科の授業くらいでしか、したことがない。「似合う似合う」と上から下まで見られて、ぼくは体が熱くなった。ぼくはおじさんの前では、とうめいでいられない。逆、かな。色つきで、いられる気がした。

でも……もしかしたらぼくの気もちを、ちょっとだけでも、わかってくれる人なのかもしれないって、思った。そんなきたいをした。生まれて初めてだった。でもぼくは、本当の自分がおじさんにわ

かってしまうのは、やっぱりこわかった。おじさんは、ぼくのことをわざわざ気にして、ぼくをどうめいでいられなくした。ぼくをきらいじゃないのは、たしかだった。そしてぼくはちよつときたいをしてしまったから、おじさんにぼくのことを全部知られて、きらいになられたらとてもつらいな、つて、それがとてもこわいなって、どうめいでいられた時には感じなかった気もちで、苦しくなった。

おじさんはぼくの、後ろにすわってぼくに体をぴったりつけてぼくをだっこした。ぼくはどきどきした。いやだとは全ぜん、思わなかった。普通の■年生は、こんな風にされてうれしいのかな。学校では、先生にだきつく男の子もいる。けども、そんなのは幼ちだと思っっている子の方が、多いかな。ぼくには普通がわからない。

おじさんはと中からあぐらになって、ぼくをひざの上に乗せてだっこした。いろんなことを話しながら、おじさんは手を動かして、ぼくの体のいろんな所をなでた。頭、ほお、太もも、おなか……ぼくはパソコンに夢中になっていて、最初あまり気にしていなかったんだけど、おじさんはぼくがた力をぬいてされるがままにしていると、いくらでもあたたかい手でぼくの体中をさわったりもんだりした。何となく、ペットの犬に人がすることと、似ているなあと思った。ぼくはいやだかと思うどころか、おじさんに、ずつとこうしてだっこされていたいなあ、って感じて、そんな風に感じる自分が、

よくわからなかった。もしかしたら、普通の人から見たら、ちよつと変かもしれない。でもだれも見えない。

おじさんは、ぼくの半ズボンの、おちんちんのあたりに右手をおいて止めた。左手はぼくの太もものはだをさすっていた。ぽんぽんって、右手がひょうしを取るように動いた。おじさんは、ぼくの反応をまつている、という気がした。いやがるかな、って。おじさんがこれから何をするつもりなのか、ぼくにはよくわからなかったけど、こわくはなかったし、だっこはされていたかった。それに、またもう一度、ここに遊びに来たかった。

おじさんの右手は、ぼくの足の間に入って、ズボンの上からぼくのおちんちんを、かるくにぎった。その手がゆるんで、またにぎった。もう二人とも、お話しなかったし、ぼくはマウスをにぎる手をはなしておじさんのうでに乗せて、顔はパソコンの画面をじつと見ていた。体が熱くなってきた。おじさんはぼくのおちんちんを、ぎゅっ、ぎゅっ、て何回かにぎった。ぼくは変な気もちになった。変つていうのは、これまでに感じたことのない気もちだから、そうとしか言いようがない。

それからおちんちんが、ちよつとふくらんでかたくなった。おじさんはもう遠りよしないで、ぼく

のそのかたくなったおちんちんをきゅつとつまんで、もんだ。何だか気もちがよくて、おちんちんの先はじとじとして、それは困るな、って思った。同時に、これはぜったい他の人に見られちゃいけないし、二人にも知られてはいけないことなんだと思った。

3

ぼくはおじさんの家に、毎日のように行くようになった。

その時は、普通から見てもおかしくないことしかなかった。でも土曜日は、今度は寝そべってマンガを読むぼくにおじさんはかぶさってきて、ぼくをくすぐった。ぼくは「やめてよおじさん」って笑いながら言って、おじさんをくすぐり返した。ぼくがおじさんに、ほとんどいいねい語を使わなくなったのはたぶんこの時からだ。ぼくたちはだき合っただけじゅうたんの上をごろごろころがった。ぼくの方からおじさんにだきついたのも、この時が初めてだった。

おじさんは、大学とか、人前でしゃべる仕事をしているせいとか、声も生き生きしていて、話し方も

うまかった。いつもぼそぼそしているぼくとは全ぜんちがう。でも普通じゃないひみつを、ぼくと二人でもっている。話の内容もうそがいっぱいまざっているのに、きつとだれもうたがわれない感じの、笑顔でスムーズにしゃべるんだ。

初めておじさんの家に遊びに行った日から、二か月くらいたった。梅雨が明けた。

ああいうのは二人だけのひみつなんだ。

ぼくはみんなの見ている前で泣きそうになった。

その話を聞いたおじさんの顔は、今まで見たことがないくらいこわくて、本気でおこっているように見えた。ぼくは言わない方がよかったかな、ってすごく不安になったけど、おじさんはぼくをそつとだきよせて……

おじさんはすごく頭のいい人だし、ぼくにはやさしいけど、やっぱり、本当はこわい人なんだと思った。人には言えないひみつもある。

ぼくの本当のお父さんがだれなのかは、本当にわからない。本当のお母さんはたぶん、あの人だと思う。

でもその日は台風が来ていて、すごい雨と風だった。ぼくは外にるのがこわくて、押し入れにかかれて……ぼくの名前を呼んだ。「こういち！」って。

ぼくは泣かなかった。

最初の家で、ぼくは「じこぶっけん」っていう言葉を聞いた。その時はよくわからなかったけど、ぼくは「じこぶっけん」だから、ただでさえ迷わくなのに、よけいやがられているんじゃないかって思ったのをおぼえている。

ぼくはそのくらいから、なるべく目立たないように、いるかいなかかわらないようにすれば、人に意地悪もされないんじゃないかって考えて、とうめいになる方法を研究した。そうすればぼくのひみつも、知られずにすむ。

ぼくは、「言ったらおじさんはぼくをきらいになると思うから、ぜったい言えない」と正直に気もちを言った。

おじさんは「そんなことはない。やくそくするよ」とやさしく言ったけど、ぼくは信じられなかった。「どんなことを言うかわからないのに、どうしてそんなやくそくできるの？」ってぼくは、少しおこって言ったような気がする。おじさんみたいな立派な人に、ぼくの何がわかるんだろう、って、思った。

「ぼく、おじさんの子だったらよかったのに」

「私は、どうしてもほしいと思ったものは、どんなことをしてでも、手に入れようとする。そういう人間だ。これまで本当にほしいと思ったものは、だいたい、手に入れてきたよ」

十

いつかおじさんの方も、いろんな、あまりだれにでも言わないようなことを、話してくれた。

ぼくみたいにとうめいにはなれなくて、おじさんは戦ったんだ。ううん、おじさんは例えとうめいになれても、戦う子だったと思える。ぼくみたいに逃げないで戦う。だからほしいと思ったものは何でも手に入れるって、自信をもって言えるような偉い人になれたんだろう。

4

梅雨明けの、六月さい後の土日。ぼくは初めておじさんの家に泊まることになった。

ぼくとおじさんのひみつのことは、長い時間おじさんの家にいるときは必ずあったし……

お泊まりになれば、きつとおじさんはひみつのことをすると思う。今までで一番長い時間、続けて一しよにいるんだから、また新しく、今までしなかったことを、するかも。ぼくはそれが楽しみなよ
うな、こわいよな、うれしいことのような、いけないことのような、両方の気もちにゆれて、でも
断るなんて考えられなかった。ぼくとおじさんがどうするかは、けっきよくおじさんが全部決めるん

お昼ごはん、夕ごはんの仕こみが終わる頃には、二時半を過ぎていたと思う。

十

おじさんの言う、「ほしいものを手に入れる」というのはこういうことなのかも、と思った。でもおじさんは、おくさんが生きていて本当の子どもがいても、こういうことするのかな。おじさんの手はぼくのおちんちんをもんでいて、太ももをなでていて、ぼくのおちんちんはかたくなっている。

おじさんはぼくの半ズボンのボタンに、手をかけて外そうとしていた。

「ぬがすよ」

と言つて、全くぼくの手を気にしなかった。何をどうするかは全部おじさんが決める。今までも、たぶんこれからも。ぼくはおじさんのしたいことをされてきて、いやだと思つたことはなくて、ただ不安や、こわさや、悪いことかも、とかいう思いと、気もちよさへの予感とか、きたいとか、うれしさや幸せな気もちとかがごっちゃになってわけがわからなくなる。そしてまた次の日も、おじさんに

会いたくなる。

……白いパンツの上から、ぼくのおちんちんをつまんだりもんだりした。ぼくはどんどん体が熱くなり、汗をかく。かたいおちんちんの先が、じわつとしめる。おじさんはパンツの中に手を入れた。……でもその時より、おじさんの指の動きはもつとはげしくなつて、おじさんはぼくのおちんちんの皮を、ゆっくりむきおろした。

おじさんは皮がむけた先が少し赤黒い、ぼくの三倍も四倍も大きい、根本とかに毛がいつぱい生えたおちんちんを見せてそう言った。ぼくははずかしくてだまつてうつ向いたけど、自分の小さなおちんちんが、ただ大きくなるだけじゃなくて、形もこんなに変わるのかなつてふしぎに思ったし……むかれたぼくのおちんちんの先は、何だかシャワーのお湯が当たるだけでいたかった。

おじさんはぼくのおちんちんの先を指でさわった。それも、パンツのきれが当たるのもいたかった。ぼくは「いたい……」って声に出した。おじさんの顔は見られず……その指でおじさんは、ぼくのおちんちんの先に、ちよんちよん、つてふれる。ぼくは何か、かるい電気みたいなのを、背中に感じて……

「気持ちいい？」

おじさんはぼくのおきの下に手を回してもち上げ、ぼくをあぐらのひざの上に乗せた。何回もしてもらっているだっこのしせいだけど、今日はおしりがむき出しで、おじさんはぼくのパンツとズボンを、さらに下ろして足からぬき取ってしまった。それからまた手をなめたみたいで、ぬれた手のひらでぼくのおちんちんをにぎりこむ。

おじさんのおちんちんは、もうぼくのおしりの下にある時からそうかなあと思っていたけど、おふろで見たより大きくかたくなって、ぎゅつとななめ上を向いていた。おじさんは自分のをさわっていないのに、気持ちいいのかな……。

「幸一はセックスって知ってる？」

「言葉は聞いたことあるけど……知らない……」

「でも、お母さんは……苦しそうだった、けど……」

「すごく気持ちいい時と苦しい時って、似たような声、出るもんなんだよ」

「でも、ぼく男……だよ」とやつと言った。

「おじさん、ぼく、こわい……」ってぼくは正直に言った。

「こうかいしないね？ と中でもやめないね？」

ぼくはまたうなずいた。もうあまり何も考えずに。

十

大人の人には大人のおいがある。男の人はタバコのおいがすることが多くて、時々お酒のおいもある。女の人には化しようのおいがする。ぼくはどっちも好きじゃない。特にお化しようのおい。おじさんは口をくつつけてもタバコのおいはしない。でも汗のおいが強くなったような、そ

んなにおいがする。おじさんのつばがぼくの口の中に入ってきているみたいだけど……

おじさんは右手でぼくの頭をかかえて、いつそう強くぼくにくちびると顔を押しつけた。ひげそののあとがじやりじやりする。それから左手をぼくの背中に回し、おしりをなで、それからかたくなっているぼくのおちんちんをさわって、にぎって、もんだ。

指を口に一本ずつ押しこまれて、それもなめた。

ぼくはくすぐったさや、鳥はだが立つ感じや、おちんちんの気もちよさがきゅつと強くなると……
「いたいかな。まあだんだんなれるよ。でもちよつとやさしくしてやるからな」

逃げたいような、もっと続けてほしいようなふしぎな気もち。もちろんおじさんはと中でやめたりはしない。

いたいけどきゅーんとくる気もちよさが……

「セックスでね、気もちよさが、一番高い所に来て、つきぬけることを『いく』っていうんだ。日本ではね」

つきぬける……。

†

「これはね、おしっこじゃないから。おじさんは幸一が来る前にシャワーできれいにしておいたから心配ないよ」

おじさんはこれから気もちよくなることをきたいしている。

ぼくはおじさんに言われるまま、おじさんのおちんちんの先のえきをぬりひろげて、手でぬるぬるのおちんちんの先をにぎって、もんで、こすって、おじさん気もちいいかな、って思いながら、何回かちらちら、おじさんの顔を見上げた。……

でも「普通」の男の子はセックスしないと思う。

次はぼくががんばる番だった。

ぼくは口を開けた。

強い命令のくちようだった。ぼくはできるだけ大きく口を開けて、おじさんのおちんちんの先の、皮のむけたふくらんだ部分を口の中に……

「もうちよつとだ……幸一、びつくりするといけないから、今言っておくけど、大人の男はね、いく時、さつきみたいなのうめいのえきじゃないのが、たくさん出るんだ」

でもぼくとおじさんは男と男だった。

「ぼくは出ないの？」

「かわいいな幸一」

そんなに乱ぼうにしなくても、ぼくががんばるのにな、ってちよつと思つた。

ぼくの口の中にじゅわーつと……

5

「幸一、こつちにおしりを向けて、四つんばいになりな」

「そんなの汚いよ……」

「いたくない？ さけたりしない？」

「おしりの穴も気もちよくなるの？」

ぼくはきいた。うんちする所なのに気もちよくなったりするのかな。でも考えてみれば、おちんち

んはおしっこをする所だ。

「おじさん……おなか苦しい……」

「今度はもうちよつと、ぎりぎりまでがまんするんだぞ」

†

おふろを上がって、ぼくたちはおじさんの言うとおり、はだかのままでごはんを食べた。

†

あんまり続けられると変になりそう。……ぼくは続けてほしいのかやめてほしいのかわからない。

「がまんだ。体の力をぬかないと気もちよくならないぞ」

ぼくのおしりの穴のあたりはぬるぬるがたくさん流れているから。

「いたい、いたい……」ってぼくは高い声を出して、またおじさんの方に手を伸ばした。

「大丈夫、……これ以上はいたくならないよ……」

おじさんにやめてもらおうと手を伸ばした。

でもおじさんは、こしをまた引いて、どんと……

これがおしりのセックスの気もちよさなのかな。

おじさん早くいってほしいよ。交代でぼくの……

入り口の近くがじゅくつと……

やっぱりばれていた。ぼくは顔が熱くなる。

「でも幸一なら気もちよくなると思うよ」

おじさんはなれているから何でも予そうができています。

「じゃあ次は見えないかっこうでやろう。犬みたいに四つんばいになってごらん」

†

ああまた、またもれそう。

ああ、きゅんきゅんがくる。頭の後ろに冷たい何かが……

何年かしてせいえきが出るようになったら、こんな感じなのかな

「そうか、よかったな幸一」

†

何だかびみように、口の中を切ってしまった時の味がした気がした。

ぼくはおじさんのおちんちんをおなかがわに引っぱってうらがわをそうじしたけど、その時おじさんのおちんちんの、たまのつけ根のあたりに、小さなきずかやけどみたいなのを見つけた。よこに線になって、先がわになって、数字の9か6みたいにも見える。

ぼくはそうじを止めてそこをじっと見てしまった。

「うらやましいな……」

「あれはうそだ」

「幸一は人間だ。おもちゃや人形とは違う」

「目がさめたね、幸一」

「おじさん、まだせいえき出るの？」

ぬるぬるの指先がわきの下からこしとか……

「もつと速く！ おじさんをいかせてくれよ」

今ぼくもきつと苦しそうな顔をしている。

ぜったいだれにも知られちゃいけない。

「よし。いいね。じゃ、そのかわり、おじさんにくつつかやくそくしてくれ」

7

おじさんは全部わかっていた。

続きは本編で！